

学道一如

発行
小樽双葉高校
新聞部
2026年7月21日
第25号

61名の中学生が説明会へ

ドリプロ・部活動を体験

7月11日、中学生と保護者を対象に本校の学校説明会が開催された。吹奏楽部による歓迎演奏のあと、全体で学校説明があり、ドリプロ体験、部活動体験、特進授業体験が行われた。本校生が運営を随所で支えた。

開校一十九年

自分らしく生活デザイン

全体会では倉内校長先生の挨拶のあと、北村先生から双葉高校の紹介が次のようにあった。本校は一九〇七年に西本願寺の宗門校として開校し、今年は一十九年目になる。卒業性の進路は多様で、大学

部演奏の歓迎演奏は、吹奏楽部による「MILKの好きな音楽」を披露。吹奏楽部による「MILKの好きな音楽」を披露。



医療福祉▼「知っているようで知らない？包帯・三角巾の使い方」
実際に包帯を巻いて、使



サイエンス▼「砂の解析」

松田義章先生から「石狩湾岸、銭函、望来周辺地域における砂の特性について」短い講義を受け、銭函と石狩湾の砂の粒度組成を調べました。砂をふるいにかけ、顕微鏡で観察しました。



グローバルカルチャー▼「Tadで世界の文化の違いを学ぼう」
タフレットでカルチャークイズに挑戦しました。



ビジネス▼「アイデア出しを持って体験しよう」
持てるものを使い、世の中の問題を解決する。カードゲームを用いた。



フード▼「自分の健康は自分で守る」
グループでオレオポップに挑戦した。ポテトチップスやウインナーのスムージーもいた。長谷川由紀子先生から食品摂取の仕方



制服は5年前に現在にデザインに変わった。Be Yourself. (自分らしくデザイン)を合言葉に本校で学んでほしい。

留学体験 (サウスバリーントン高校派遣プログラム)
間宮さくらさんからバリーントン州サウスバリーントン高校での短期留学、ホームステイの体験談が報告された。貴重な異文化体験であったという。

また、本校にはPBA留学プログラム (ハワイ・ホノルル) が1ヶ月半ある。

部活動紹介 (新聞部・弓道部・バドミントン部)
実績を重ねてきた3つの部活動がプレゼンをして、部活動体験の案内をした。

入試・奨学金制度
卒業生のメッセー
入試広報を担当する野月先生から入試制度、奨学金制度などの説明があった。

部活動の中には強化指定部 (野球、スキー、バスケットボール、バレー、吹奏楽) があり、顧問の先生から個別に勧誘を受ける場合がある。また、強化指定部にはない競技、たとえばテニス、体操などでチャレンジ奨学生として認められ、活躍する生徒もいる。個別相談にも応じるとい

ける場合がある。また、強化指定部にはない競技、たとえばテニス、体操などでチャレンジ奨学生として認められ、活躍する生徒もいる。個別相談にも応じるとい

最後に2名の卒業生からのビデオメッセージを視聴した。

一人目は今春卒業した三田彩葉さん (明治大学・文学部)。

特進で英検準一級を二年時に取得。サウスバリーントンへの派遣、生徒会執行部として、チャリティーバザーを企画運営するなどの活躍をした。

三田さんは本校について「安心して迷惑をかけられる」学校と語っている。様々な面で適切な関わり合いが持て、信頼感があるのだらう。

二人目は二〇一九年卒業のミリケン花菜さん。現在、国際線の客室乗務員として活躍している。本校での経験 (留学、見学旅行など)、出会いが現在の仕事へと繋がっているという。

全体会のあとは左の5つのドリプロ体験、制服試着体験、部活動体験 (吹奏楽、弓道、バドミントン、バスケットボール、バレー)。

全体会のあとは左の5つのドリプロ体験、制服試着体験、部活動体験 (吹奏楽、弓道、バドミントン、バスケットボール、バレー)。

ボール、美術、写真、華道、茶道、新聞)、特進授業体験が実施された。

参加者の満足度高い

終了後の参加者アンケートから、全体会ならびにドリプロの満足度が高いことがわかった。以下は参加者の声。

【参加者の声】

▼双葉高校についての概要やコース、ドリプロなど、詳しく教えていただいて、学校説明会に参加できて良かったと思いました。

▼今回の説明会を通して、自分将来何をやりたいのかが少しづつ、はっきりさせることができました。来てよかったなと思いました。ありがとうございました。

▼先生や生徒が良い対応をしてくださり気持ちよく終えることができました。

▼体験できるので「こんなふうをやっているんだ」というのを知ることができました。

▼グローバル専攻の体験でやった Kahoot が楽しかったです。双葉に行ってみようと思いました。



戦艦大和の完成から85年

戦艦大和の砲戦能力



大和型戦艦は、全長263メートル、最大全幅38.9メートル、基準排水量65000トンという巨大な船体を有していました。これは

現代における巨大な豪華客船やタンカー、同じ軍艦である航空母艦（空母）など300メートルを超える艦船からすると小さいように思えますが、純粋な戦闘艦としては最大であり、当時としては最大の戦闘艦でした。その理由は、主砲45口径46センチ三連装砲を3基9門という世界最大の艦載砲を搭載したこと。この46センチの口径を持つ艦載砲は先にも後にも大和型だけであり、大和の主砲は敵艦を一撃で葬ることが可能なほど強力でした。また、自艦の砲弾にも耐えられる『大和』の装甲厚は、砲塔付近で最大660ミリを誇りました。主砲の最大射程距離は42000メートルを誇り、小樽から発射すれば羊蹄山まで届く距離です。これほどの大砲が製造されたのには、帝国海軍に敵の射程外から一方的にアウトレンジで攻撃するという考えがあったからでした。しかし、42000メートルという距離では敵艦は地平線の彼方であり、遠距離砲戦というものは戦艦単体では不可能でした。そこで戦艦は艦載機である水上機を敵艦の上空に飛ばすことで、遠距離砲戦を理論上可能に

大和は小さい艦？

本来、46センチ砲ともなる大砲を搭載するには、260メートルを大きく超える巨大な船体が必要になるはずでした。しかし、巨大すぎる船体は速力の低下など航行能力を損なうことが予想されました。そのため、旧来の日本戦艦から一転した船体形状で設計され、全長と全幅は最低限を確保。艦首には当時は珍しいバルバスクという突起を装備し、波の抵抗を打ち消すことに成功しました。艦尾には方向を定めるための舵を2枚設置。二枚舵とすることで航行不能となる確率を下げる努力が行われました。また、これらの設計によって旋回半径を小さくすることに成功。更に厚い装甲を主砲や艦橋などの重要防御区画に集中して施すなど、工夫が詰まっていました。この部分に使用された鋼材は満州から搬入されたもので純度の高い鉄でした。それもあり重要防御区画の装甲は、同世代の戦艦との砲戦において、近距離でなくては決して貫通できない厚さを誇りました。これにより、最強の主砲を持ちながらも最大速度27ノットを確保し、航行における安定性と俊敏さ、燃費効率を維持できたので



(上写真) 戦艦大和にも搭載された『零式水上観測機』の実寸模型と有名な零式艦上戦闘機（零戦）とは同世代。
(下写真) 大和ミュージアムにあるリニューアルされた十分の一戦艦大和



(上写真) イージスシステムを搭載した護衛艦『こんごう』
(中写真) 西側諸国の艦船に搭載される『ハーブーン』艦対艦ミサイル
(下写真) 戦艦『大和』と同世代の航空母艦『瑞鶴』

す。更に大和型では注排水装置を搭載。これは片舷が浸水した場合、反対側に注水を行うことで艦の傾斜を復元するためのものでした。速力の低下にはつながるものの、不沈艦とするための重要な装置でした。この技術は現在の艦船でも幅広く使用されています。また、大和型戦艦の旧来の戦艦との外見状の違いには、『大和坂』と呼ばれる波型の甲板が存在しています。これは、凌波性の向上や主砲の重心を下げる役割を持っていました。この甲板部分も大和の洗練された艦容をつくり出す一つの要素と言えるでしょう。大和型は46センチ砲という巨砲を搭載するには、あまりにも小さい艦として完成し、建造に携わった技術者の方々も小さな船体にこの大砲を収めたことこそ誇るべきと仰られていたそうです。正に、当時の日本の持ちうる技術の粋を集集し建造された戦艦でした。

秘密裏に建造された戦艦と建造費

大和型戦艦は、最新の技術と規格外の大きさを誇りました。しかし、そんな巨大戦艦の建造にはどうしても多額の資金が必要でした。また、他国に悟られないため徹底した秘密保持が行われました。軍艦は1トンあたりの価格には目安があり、戦艦は約2100円でした。これを大和の基準排水量に当てはめると、約1億3500万円になります。実際は約1億3800万円であることから、ほぼ正確に価格を求めることができました。しかし、この価格を現代との物価差があるため、現代に置き換えると約3500億円となります。これは、イージスシステムを搭載したミサイル護衛艦の価格に相当します。では、当時のGNP（国民総生産）では、当時のGNP（国民総生産）比にしてみるとどうなるのでしょうか。

1937年のGNPは約234億円のため、GNP比は約0.59パーセントとなります。2024年のGDP（国内総生産）は約609兆円であるため、このうち0.59パーセントが占める金額は、約3兆5900億円となります。つまり、現代での国の負担感に換算すると3兆円を超える価格になります。実際に現代では再び大和を建造する場合の費用を算出することはできませんが、当時ではこれほどまでに大きな負担がありました。実はこの価格は、他国に巨大戦艦の建造を悟られないように、実際の建造費を秘匿。41センチ砲搭載の戦艦1隻と数隻の駆逐艦、潜水艦などの架空艦艇の予算として承認されていました。このため、46センチ砲も海軍内で使用された正式名称に40センチ砲と記載されるなどの隠蔽が図られました。

建造されるのが戦艦ではなく空母だったら

余談ですが、大和の代わりに航空母艦を建造するとして、大型の航空母艦を建造する場合、建造費は約1億円で済みました。しかし、航空母艦には航空機の交換が必要であり、何よりハワイ作戦時でも搭乗員の確保がなんとかできた具合でした。そのため、航空母艦の建造へ変更した場合でも海軍は戦力の充実に苦戦を強いられなかった可能性があります。当時の軍事予算は満州事変以降増大していたため、GNP比14パーセントとなっていました。その中での大和建造というのは経済に大きな負担を強いていたと言えます。大和型戦艦1隻の年間の維持費は、現代価格で100億円。砲弾1発の価格は500万円。現代における対艦攻撃兵器であるハーブーン対艦ミサイルは1発約1億8000万円であるため、砲弾とミサイルいずれにしても高価なものだということがわかります。

(坂東 元) (続く)